○ 論文名

Ultrathin versus pediatric instruments for colonoscopy in older female patients: A randomized trial

○ 論文要旨

大腸内視鏡検査は、高齢女性や大腸憩室多発例などで難渋し、受診者に苦痛を与えることが少なくありません。既報では、大腸内視鏡検査困難例において小児や上部消化管内視鏡検査で使用される細径スコープの有用性が高いと報告されてきました。近年、経鼻スコープと同様の直径 7mm の極細径大腸スコープが開発されましたが、その臨床的有用性については懐疑的でした。

本研究は、直径 7mmの極細径大腸スコープに関する世界初の臨床試験です。大腸内視鏡検査困難となりがちな高齢女性を対象として、極細径スコープと従来型細径スコープ(11mm)のランダム化比較試験を実施しました。70 歳以上の女性 77 名（極細径群 39 名と細径群 38 名）を対象とし、主要評価項目：numerical rating scale により測定した検査受診者の苦痛度、副次評価項目:盲腸到達率、回腸挿入率、盲腸到達時間、腺腫発見率を評価しました。

主要評価項目である“検査受診者の苦痛度”は、極細径群で有意に低い結果がえられました（$p<0.0001$）。一方、盲腸到達時間は極細径群で有意に長い（$p=0.022$）結果でしたが、盲腸挿入率、回腸挿入率、腺腫発見率は同等でした。

この結果は、極細径スコープは細径スコープとほぼ同等に用いることができ、検査受診者の苦痛を有意に軽減できると判断されます。苦痛軽減の機序としては、極細径スコープを用いた場合、大腸の壁側腹膜や腸間膜に存在する知覚神経を刺激するほどに腸管の過伸展が生じないことによると推察されます。国際的には、麻酔下に大腸内視鏡検査を実施するのが標準的ですが、本研究は、高齢女性における無麻酔下大腸内視鏡検査の可能性を示唆しています。